

戦車道？いや僕男だし
...

るるるる～しゅ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦車道？知らない子ですね…

目次

第8話	7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
114	87	70	49	35	23	8	1

第1話

戦車道とは

実弾を用いず、戦車で戦う競技です

乙女の嗜みとも言われています

やはりこの戦車道にも家柄というものがあります

例えば西住流 島田流などが有名です

しかしこの戦車道というのは女性しか出来ません

男の子だって戦車は好きです しかしダメなのです

僕は小さな頃から戦車が好きでした

などということは無く、戦車の名前?…知らない…

というレベルです

そんな僕は今お母さんの前で正座をしています

何故でしょう?!

実は戦車道は、整備や参謀などは男性がやってもいいのです

そして参謀をやれと言われています

もちろん断りました　するとこのお母さん、やらないのなら仕送りを辞めると脅してきました

なんて酷いお母さんだ!!鬼!!悪魔!!若作りばば痛い待ってごめんなさい冗談です!!!!

つと、自己紹介が遅れましたね

西住麗々　この漢字でると読みます

産まれる前に女の子だと言われてたらしく、ほかの名前は決めてなくてそのままこの名前にしたそうです

そうです、僕は先ほど説明した西住流、その家系に産まれました

ちなみに上に姉が2人居ますが、僕は全寮制の中学にいたので殆ど会う機会がありません

まあこの話はさておき

何故正座させられているのかと言うとですね…

しほ「もう一度言います、黒森峰学園に入学してそこで参謀を学びなさい。そしてその知識を黒森峰の戦車道に捧げなさい。」

麗々「だからお母さん、何回も言うけど戦車道なんてやったこともなければ知識もな
いんですけど」

しほ「だからそれは特例でどうにでもなると何度も伝えただけですか？」

麗々「そういう問題じゃないと思います??もつとこう…あるじゃん??」

しほ「言いたいことがあるのならハッキリ言いなさい。」

麗々「去年まで女子高とか友達も出来ないと思いませんか？」

しほ「学校は学ぶ場所です、青春は戦車道に捧げなさい。」

麗々「…………嫌だと言ったら？」

しほ「もう一度言います、黒森峰学園に入学してそこで参謀を」

麗々「無限ループって怖くね？」

これあれだ、はいつて言うまで繰り返すゲームみたいなやつだ

こんな感じですと脅されています…

誰か助けて…

麗々「それより僕野球で推薦貰ってるんでそっちいっちゃダメですかねお母様…」

しほ「ダメです、どうせ貴方じゃベンチにすら入れないでしょう。」

麗々「おうコラこちとら中学日本代表やぞ」

しほ「スポーツと言うのは中学と高校ではレベルが違うのよ。」

麗々「任せて、僕の豪速球とバットでブイブイ言わせるから」

しほ「貴方キャッチャーでしょ、それにホームランなんて打てる力無いでしょう…」

麗々「ビブラートに包んで」

しほ「オブラートよ…」

そうなのです、速い球も投げられなければホームランなんて夢のまた夢。

でも日本代表に呼ばれた

理由は1つ、守備だ。

野球には9つのポジションがある。

僕はどこでも守れる、ようするにスーパースタブだ

戦車道で言うならば、砲手でも装填でも運転でもなんでもそつなくこなせる
逆に言うところも自分より上がいるから、その補填でいるってこと

そして選ばれた理由の本命

それが配球だ

僕はスーパースタブだが、スタメンマスク　ようするにキャッチャーでスタメンで出場
している

キャッチャーはフィールド上の監督と言われるほど重要なポジションだ。

ベンチからの指示を伝え、打たれないように作戦を考える

そして僕は配球　打たれない作戦を考えるのが得意だった

打者の構え　バットの握り　打者の視線：

それらを見ていると、何故か分かるんだ。

何を狙っているか　どのコースを狙っているのか。

だから　打たれない　当たらない　飛ばない

だけどもんな見るのは投手だ

どんなにいい配球をしても

誰も僕を見てはいない

そして抑えた投手は舞い上がる

俺の実力を見たかと

そして捕手が他に変わった途端

人が変わったかのように崩れる

今まで空振りが取れていた変化球が

打者が仰け反るほど良かったストレートが

機能しなくなる

そのリードに目をつけてくれた高校は幾つかある

まずはサンダース付属 今年から共学になった高校だ

リッチな学校らしく、既に野球を心置き無くできる設備もあるようだ

次に知波単学園 ここはとにかくイケイケ押せ押せだそうで、チームをまとめられる

選手が欲しいとのことでは是非と言われている

最後にプラウダ 実は1番入りたい高校だ

日本代表時代にバッテリーを組んだ投手がプラウダ入学を決めたらいいからだ

麗々「とにかく、僕は野球がやりたいんです。戦車道なんてやつてる時間はありません。」

しほ「ならば両方やればいいんじゃないかしら？うちも野球部は作るらしいから麗々「やるからには本気でやりたいです。なので両立は出来ません。」

しほ「……まだ時間はあるわ。ゆっくり考えなさい。」

そう言うとお母さんは頭を抱えて出ていった。

麗々「大体なんで僕に参謀をやらせようとするんだろ……？」

僕も首をかしげながら自室へと戻って言った。

1つの視線には全く気づかなかった。

第2話

皆は長期休み中は何をするんだろう??

僕は野球の事しか頭にないならそれ以外にやることと言えば、睡眠くらいだ。

勉強? 知らない子ですネ:

ちなみに勉強に関しては国語はたまに高得点は取れるが、数学は壊滅的だ

勉強の話はやめよう、僕は今冬休み中だ

今僕は電車に揺られて実家に帰ってる途中です。

麗々「電車降りたら姉さん達が迎えに来てくれるらしいけど、まさか戦車で来ないよね??」

車でも酔うのに戦車なんか乗ってみろ、吐くぞ
ゲロの進化系ゲロガまでありえる。どこの馬だ

麗々「そういや姉さん達にあうの半年ぶりくらいかなあ？テレビではよく見てたけど」

うちの姉達は凄い

黒森峰で10連覇を無事に成し遂げた。

寮のテレビで 西住姉妹特集!!なんてものが流れた時には鼻からラーメン飛び出した

ぶっちゃけるとコンプレックスだ。

忘れたけどなんか二人とも2つ名とかあるらしいし、実力も戦車道の中ではスタークラスって言うし。

僕も自慢じゃないが2つ名はある。

バッテリーを組んでた投手の2つ名が「東北の魔術師」だ。

僕？【熊本の何でも屋】だよ文句あるか!!!

麗々「到着まであと30分くらいかあ…寝たら間違いない寝過ぎそう…」

寝過ごしました

テヘペロ♡

麗々「やべえ姉さん達から鬼のように電話かかってきてるぅ…」

新着メッセージが46件あります

不在着信30件

麗々「とりあえず電話かけなきや…」

??「その必要は無いぞ」

前から戦車に乗った姉達が手を振ってる

なんの戦車かは分からない

麗々「あ、まほ姉 みほ姉も」

みほ「久しぶりだね、アホ弟」

まほ「久しぶりだな、アホ弟」

麗々「酷くないですかね??」

みほ「寝過ぎごしといて何言ってるの??」

まほ「まあそう言うな、何でも屋（笑）の仕事でもしてたんだろ」

麗々「（。D。）」

言い返すと怖いので顔だけで威嚇しました

この2人はぼくのことを完全に見下してる。

美人だからってなんでも許されると思うなよ!!

彼氏出来たことも無いくせに!!

麗々「姉さん達そんなだから彼氏出来ないコヒユツ」

み、鳩尾にローファーがクリーンヒットした…

しかもダブルで…

麗々「そ、そんなだから彼sみほ「次言ったら分かってるよね？」いや流石僕の姉さん達引く手数多だよね！」

鬼め…

みほ「結局麗々は高校どうするの？黒森峰来るの？」

麗々「いや、プラウダに行こうかなと思ってる」

まほ「は？お前それ本気で言ってるのか…？」

麗々「え？まあ本気だけ…」

みほ「私達が決勝で戦った相手どこか覚えてる？」

あつ…

麗々「で、でも勝ったじゃん!!」

みほ「麗々のお陰でね、雨で川が増水してるのを見て運営に掛け合ってくれて。川に落ちた場合のルールの追加とか急に言われて、何かと思つたよ。」

まほ「ああ、まさかうちの車両が落ちるとはな。

もしルールの追加がなければどうなっていたことか…」

そうあの日、決勝だからと試合に強制連行されたんだ。

しほ「麗々、貴方ならこの局面どうする？」

麗々「どうするも何も、左右から回り込んで来ると思うしど真ん中突っ切るでしょ」

しほ「何故左右から来ると思ったの？」

麗々「それしか方法が無いでしょ、そうさせるためにわざわざみほ姉とエリカさんが誘導してるんだし」

しほ「ちよつとまって、何故黒森峰が誘導していると分かったの…？」

麗々「わかるんだよ、考えが手に取るように。」

しほ「…そう。」

ん？でもこの方法だと川付近を通るよね…

麗々「お母さん、これ川に落ちた時ってどうなるの？」

しほ「？どうにもならないわ、続行よ」

麗々「なるほど、試合の中止かルールの変更しないと黒森峰の負けだね。きつとみほ姉のせいで」

まあそこから色々あつてルールの変更してもらつて、無事優勝めでたしめでたしになりましたとさ

この後からお母さんの黒森峰勧誘が始まつたけど…

みほ「でも、落ちる可能性があるつてだけでよくルールの変更して貰えたね??」

麗々「可能性じゃなくて100%落ちるつて思つたから通つたんだよ?」

まほ「何故言いきれぬ??」

麗々「戦車には人が乗つてるんだ、敵を追いつめたら何をやる? 弾を打つでしょ」

麗々「1両落とせば有利に繋がる。1両逃せば不利になる。その状況で打たない奴は勝負師じゃない。」

麗々「サッカーなら誰か怪我すれば敵味方関係なくボールを外に蹴り出して試合を止める。野球でもインプレー終了後に試合は止まる。だからこそ際どいプレーができるんだ。」

麗々「けど戦車道はどうだ？特殊な素材で出来ていますので問題ないです？救援に向かいますが10分はかかります？僕ならそんなの待たずに敵でも助けるね。勝利なんかより命だ。だからみほ姉も飛び込んだでしょ？」

みほ「そうだけど…でもどうやってルールの変更を通したの…？管理委員は結局堅物って聞いてたけど…」

麗々「…まあ色々ね…けど、ルールの変更しなければみほ姉のフラッグ車は間違いないく打たれてたよ？せめて指示を出してから飛び込むべきだっだと思うよ。あと命綱。命綱!!!」

みほ「うっ…ごめんなさい…」

まほ「その辺にしておけ、そろそろ家に着くぞ」

ルールの変更を受け付ける代わりに条件を出された

・変更理由について詳しく説明をする

・戦略・戦術に関しての知識を提供する

まあここまではいいいいけど最後の条件がなあ…

・決まり次第条件を提示する

いやあこれはずるい。流石大人汚い。

そんな大人に対しての嫌味を募らせていたら我が家が見えてきた。

なんでヘリが止まってるんですかねえ…

しほ「おかえりなさい。早速だけど麗々。話があるわ。」

ひええ…お偉いさん達4人もいるよお…

麗々「お、お話とはなんでございますか…??」

お偉いさん「うむ、君には高校で戦車道をやってもらいたい。それが最後の条件とする。」

麗々「嫌ですけど?」

何言つてんだこのじじい。僕は野球がしたいんだ。

偉「なに、形だけでいい。ただ、君の力を理解してない奴らが沢山いてだな…こちらも体裁が悪い。」

しほ「だからあなたには戦果をあげて欲しいのよ。完膚なきまでの戦果を。」

麗々「…それさえやれば野球に専念してもいいんですか??」

偉「勿論だとも、ただ高校は選べない。君には黒森峰かプラウダのどちらかに行つてもらう。」

麗々「プラウダに力を貸して姉さん達を潰せと?」

しほ「何故プラウダに行く気なのかしら…」

いや、元々プラウダ行きたかつたし…

野球をやるなら本気でやりたいからね。

しほ「まほやみほの力になりたいとは思わない？」

なりたくないと言えば嘘になる。

勿論姉たちの力になれるのならそうしたいけど

麗々「夢を叶えるためには、黒森峰では無理です。姉たちなら僕なんて居なくても勝ち続けるでしょう。」

偉「夢か」

麗々「はい、プロ野球です。これだけは譲れません。」

しほ「もういいわ、好きになさい。

その代わり、プラウダに行けば【西住流】とは無関係とします。いいですね？」

みほ「ちよつと待ってよお母さん!!どうしてそうなるの!!?」

話聞いてたのか…

まほ「お母様…何故そこまでするのですか…?」

二人とも何やかんや心配してくれてるんだよな……でもこれはお母さんなりの優しさだ。

麗々「西住の子がプラウダなんか入ったら目の敵にされるのは誰が見ても分かる。だからお母さんは『西住流』とは無関係って言ってくれたんだよ。」

しほ「わざわざ言わなくてもいいでしょうに……」

しほ「戦車道に関してはプラウダを1度だけ完全勝利に導けば良いでしょう。その後は好きにやりなさい。」

麗々「はい、わかりました。」

みほ「……」

まほ「……」

しほ「もうこの話はいいでしょう。せつかく帰ってきたのだからゆっくりしなさい。は

い解散！」

そう言うとお母さんはお偉いさん達と奥の部屋で資料を確認しだした
あ、そうだ。あいつにプラウダに行くこと伝えなきや！

電話を手に取り電話帳を呼び出す

3 コール目に届く前に繋がった

?? 「もしもし？」

麗々 「よう、久しぶり。」

?? 「珍しいね、君が電話してくるなんて」

麗々 「まあね、僕プラウダに入学することにしたから」

?? 「本当かい!? また君とバッテリーを組めるんだね!!」

麗々 「ああ、僕も楽しみだよ!!」

?? 「これは甲子園優勝も夢じゃなくなったよ!…つと、買い物行かなきゃだからまた
かけ直すよ!!」

麗々 「うん、じゃまた今度な、秋瀬。」

秋瀬 「うん、また！」

こいつが前から話してた【東北の魔術師】

秋瀬 幸樹（こうき） だ。

今が1月だからあと3ヶ月程か…折角だしプラウダ1度見に行こうかな…？ちよつと遠いけど、3年お世話になるわけだし…

麗々「そうと決まれば日程を決めよう」

この後お母さんとも話して、三日後に行くことになった。

そしてついに当日

何故か付き添いでみほ姉がいる

なんで??

第3話

麗々「……………」

みほ「……………」

え？なんで着いてきてるの??

なんでいるの??

何しに来たの???

麗々「…姉さん??」

みほ「何」

怖っ…めっちゃ真顔なんだけど…

麗々「僕一人でもブラウダまで行けますよ…? 乗り継ぎもないですし…」

みほ「そういう心配してるんじゃないから安心して」

麗々「なんでそんなに怒ってるの…?」

みほ「怒ってない!!!」
怒ってるやんけ!!!こええよ!!!

みほ side

ほんとに何考えてるの!!?

選択肢黒森峰とプラウダで普通プラウダ選ぶ!?

こっちはお姉ちゃんとうまく麗々と同じ学校だね!とか喜んでたのに!!

そんなに戦車道が嫌なのかな…?それとも私達の事が嫌なの…?

そんな訳ないよね?私知ってるよ?

麗々はお姉ちゃんの事大好きだもんね??

私が小梅さん達を助けに飛び込んだ後すっごくお母さんに怒られて…お姉ちゃんにも怒られて…

でも麗々は そうすると分かってたよ。でも命綱位はつけて欲しかったって言うって直ぐにどこかに行つちやつた。

でも知つてるよ？ 聞いちゃつたから…

亜美 「あ、西住さん！怪我はない？」

みほ 「あ…はい、大丈夫です…」

亜美 「それは良かったわ、でももうあんな無茶しちやダメよ？弟くんもとても心配してたんだから！」

みほ 「え…？麗々が？」

亜美 「そうよく？凄い形相で審判団に掴みかかつたつて、姉さんを殺す気か!!まとも
に身の安全の確保も出来ねえなら戦車道なんか無くなつちまえ!!つて泣きながら怒鳴
るもんだからお偉いさん達も唾然としてたわ…」

みほ 「そう…ですか…」

それを聞いた時涙が出ちやつた。

つんつんしてる癖に、そこまで心配してくれてるんだなつて。

それと同時に分かっちゃった

私も伊達に戦車道10連覇チームの副隊長はやってないから。

麗々は凄いけど、思った通りに動かないと崩れちゃう

そこから這い上がることは出来ない。だって、今まで崩れたことなんて無いから。術を知らない。

私が命綱無しで飛び込んで初めて崩れかけた

自分より上の立場の人に突つかかる程に脆くなつた

でもその脆さは私しか知らない。いや、私しか知らなくていいの。

麗々は優しすぎる。誰にでも。多分野球だってそうだ。

評価されないんじゃない、無意識に自分以外が評価される試合運びをしてるんだと思う。

ホームランを打てないんじゃない、打たないんだ

自分の役割を分かっているから、無駄を省いてトレーニングしてるんだ。自分の役割

割にホームランは無いから。

一度ひたすら叩きつける練習をしてるのを見たことがある。

麗々「もつと…上から…一塁と二塁の間に転がすように…僕は塁に出れなくていい。

進塁打さえ打てれば役割を果たせる……」

自己犠牲もここまで来れば狂気だと感じた。

同じセリフを何度も何度も吐きながら永遠とバットを振っていたから。

その姿を見て私は

壊してみたいと思ってしまうた

麗々の戦略を戦術で叩き潰したらどんな顔をするんだろう

麗々の考えの裏を全て読んだらどれだけ絶望するんだろう

突然麗々の指示を無視したらどんな焦った顔と声を出すんだろう

そしてそんな麗々に私が手を差し伸べる

粉々に麗々を叩きのめしたその手で

その手を取るのか取らないのかは分からない。

けど間違はなく私に屈服する

自分の作戦じゃあ心許なくなり、私の元に助言を求めに来る

私に依存する

そうしたら

見えない首輪に繋いで一生飼ってあげる…

だからこそ黒森峰に来て欲しかった。単純に麗々と過ごせるのも楽しみにしてた。
お姉ちゃんも喜ぶし。

だから徹底的に潰してあげる

今日麗々はお試しで模擬戦でプラウダのチームを指揮することになったる

お姉ちゃんすつごく楽しみ♪

プライドの欠片も残らないようにズタズタにしてあげる

そうすればプラウダに顔も出せなくなるよね？

だから

みほ 「本当に怒ってないから!!!」
麗々 「絶対怒ってるじゃん…」

本当に怒ってないよ♪

みほ 「むしろ楽しみなくらいだから…」
麗々 「？」

ブラウダに着いて、まず戦車道チームのいる戦車倉庫へ案内された

カチューシャ 「ふーん、あんたが西住流の弟?? 覇気がないわね…」

麗々 「どうしたのかな? 迷子かな? お兄さんとお母さん探そっか??」

カチューシャ「ノンナ!!! 肅清よ肅清!!!」

ノンナ「……………」

ノンナさんはプルプル震えている

絶対笑つてるやんあれ

麗々「僕がプラウダ戦車道チームの参謀を任せました、西住 麗々です。まあそんなに長居する訳でもないので軽く接してください。あと西住流とは無関係なので、情報などは知りません。よろしくお願いします。カチューシャさん」

カチューシャ「あんた分かってて子供扱いしたのね!!?」

え、だってノンナさんがそうしろって…

ノンナ「……………」

ノンナさんの睨みつける!! 効果はばつぐんだ!!

ノンナ「よしよしカチューシャ様、あの不屈き者はシベリア送りにしましょうか?」

この野郎、俺をダシにしゃがった!!!

カチューシャ「ふ、ふん! まあいいわ! これから一緒に戦う仲間なんだから、寛大な

心で許してあげるわっ!!」

ノンナ「流石ですカチューシャ様」

もう何も言うまい…

カチューシャ「それで、実戦形式で一度指揮能力を見定めろって言われてるんだけど…模擬戦でいいかしら？」

麗々「構いませんよ、ただその件でひとつお願いが…」

みほ「私を参加させて欲しいんです！麗々とは敵同士で!!」

カチューシャ「…敵に塩を送るつもりは無いわよ??」

みほ「なので、私は麗々と同じ指揮のみとります！これなら逆に私の指揮が見れるってことでそちらの得にしかならないと思いますけど…」

カチューシャ「ノンナどう思う？」

ノンナ「…塩をくれるというのなら貰っていても良いかと」

カチューシャ「…分かったわ、では今から2時間後に始めるから…そうね、一軍を西住姉の方に、二軍を西住弟の方にお願いしようかしら？」

麗々「わかりました」

みほ 「はい！」

麗々 「みほ姉」

みほ 「何？」

麗々 「なんで僕と戦いたいかは知らないけど、完封するつもりだからよろしく」

みほ 「ふふっ、戦車道はそんなに甘くないよ??」

さて、初陣だ！サクツとかってサクツと帰ろ!!

勝者!! 一軍!! 西住みほチーム!!!

第4話

とあるアニメでこういうセリフがあります

戦略を戦術に潰されてたまるかっ!!!!

麗々「戦略を戦術に潰されてたまるかっ!!!!」
プラウダ生「どどどどどうしましょう麗々さん!!!!」

殲滅戦で、6対6で始まったんだけど、現在の状況は

僕チーム2 みほチーム5

いやあ……どうしよ負けちやう……

試合前

麗々「さつきも挨拶した通り、指揮を執る麗々です！

一軍に勝たせるつもりなんでよろしくお願いします！」

プラウダ生「むりですよ……一両も落とせる気しませんって……」

麗々「大丈夫大丈夫なんとかなるさ」

麗々「とりあえず作戦を伝えます！」

作戦はこうだ

スタートと同時に6両全てバラける

そして6角形を描くように1両づつ潰していく

みほを見る。うん、そうだよね。やっぱり初めは偵察隊を出すよねわかるわかる。

だからまずはその偵察隊を囲んで潰す

潰されたあとはどうする？ そうだよね、安全な場所に退避するよね。手に取るように

分かるわ

その後は信用得られなくて一軍達が独自で突進してくるだろうな、そこを包囲して

完封だ。

麗々「全車両で突撃…？そんなはず…」

麗々「みほ姉ならそんな作戦…そういう事か…」

麗々「残った2両!!左右に展開!!1号さん!60メートル前身後、真後ろに砲撃!!5号さん!!40メートル前進後、左に14メートル、その後右前方に向かって砲撃!!」

まさか、みほ姉の作戦じゃなく、カチューシャさんの作戦とは思わなかった。そんなブラフ使うか普通…

カチューシャ「ふふーん!!どうよこのカチューシャ様の指揮は!!」

ノンナ「流石ですカチューシャ様、しかし西住みほが言うにはここからが正念場だそうですねです。」

カチューシャ「ええ、分かってるわ動きが変わったもの。」

一軍生、2車両戦闘不能!!!

よしよし、あと3両。

もう掠らせもしない、ここからは殺戮だ

麗々「戦略が戦術に潰されてたまるか!!!」

プラウダ生「さっきも聞きましたよそれ…」

3両で囲んで砲撃をしてくるのは分かってた、けど失念してた

戦車の性能なんて知らねえ…全部同じだと思ってた…

何相手の戦車、早過ぎない…???

麗々「残り1両…相手は3両…しかも全方位囲まれて逃げ場はない…どうする…っ」

麗々「敵の中心部に入り、一旦停止、その後2秒後に全力前進!!!」

プラウダ生「了解!!」

カチューシャ「突っ込んできた!?!いいわ、蜂の巣にしてあげる!!!全車両撃てっ!!!」

轟音と共に土煙が上がる。

どうなった……ゆっくりと土煙が晴れていく。

麗々「惜しかったなあ…クソっ!!」

二軍生、全車両戦闘不能!! 一軍生、2両戦闘不能!!

西住みほチームの勝利!!!

カチューシャ「な、なんて作戦…」

ノンナ「まさか…急停止からの前進で、私達の相打ちを狙うなんて…」

みほ「……」

カチューシャ「勝ったけど、勝った気がしない…凄いわね…」

麗々「お疲れ様でした、惜しかったです。」

プラウダ生「ごめんね、前進1秒遅かった…」

麗々「いいえ、急な作戦変更ばかりでこちらこそすみません…」

「プラウダ「何言ってるの!!一軍相手にここまで追い詰めたのよ!!!凄い指揮だったわ!!!」」

麗々「……ありがとうございます……では挨拶に行きましょうか。」

カチューシャ「貴方凄いわねっ!!!負けちゃうかと思ってたわ!!!」

ノンナ「ええ、貴方が指揮を取れば、今年の大会優勝も夢ではないほどに……狂気じみてました。後半こちらの手の内が全て読まれてましたし……」

みほ「……凄かったよ。本当に……」

麗々「負けは負けです。こちらは完封するつもりでしたし、それにみほ姉が作戦を考えてくるとばかりに思い込んでました。流石はみほ姉……裏をかかれたのは初めての屈辱だったよ……」

ありえない…完全に裏をかいて、もうどう足掻いても勝ち目のない所からほぼ相打ち…？

高火力で上から叩けて無かったら、本当に完封されてたかもしれない…

戦略に勝つには戦術…

実力の差は戦略で埋められなくはないが、やはり限度がある

実際今回もそれで勝てたが、それは麗々が戦車の知識を持っていなかったからだ。

もし知識があれば…負けてた…

みほ「こんなの勝ちじゃない…しかもそこまで動揺もしなかった…なんで…？」

麗々「良かったよ本当に、練習で…」

麗々「これが本戦だったらと思うとゾツとする…」

みほ「そういうこと…」

みほ「なら、本戦でギタギタにしてあげるから…」

みほ「待ってて。」

みほ姉

麗々「いやあそれにしても強いですね、僕いますか？」

ノンナ「是非指揮をしてもらいたいですね、去年は敗戦しましたし。」

カチューシャ「本当は私だけでも勝てるんだけどね!! 確実な勝利にするために! 必要なの!!」

麗々「あのー…でも僕あまり参加する気はないんですけど…野球やりたいので…」

ノンナ「お話は聞いてますよ、大丈夫です。練習に参加しろとはいいいませんから。で

すが大会前には少し戦力、動きなどを確認してもらわないといけませんか」

カチューシャ「戦車の性能なんかも、聞いてくれれば教えるから覚える必要は無いわよ、心置き無く野球やりなさい！」

拜啓お母さん、プラウダにはいい人しかいません。

たまには優勝譲ってはどうか…？

時は巡ってプラウダ入学式、入学前にみほ姉とまほ姉からと、お母さんから入学祝い
をもらった。

お母さんからは腕時計

姉さん達からはワイヤレスイヤホンと新品のグローブをもらった

秋瀬「麗々くん、顔がニヤついてて気持ち悪いよ??」

麗々「お前に言われたくはないな…」

秋瀬「だつてここ女の子たちのレベルが高過ぎない…?」

この変態は秋瀬 幸樹

俺が惚れた投手だ。投手としてな、そっちの惚れたじゃないやめろ!!!!

しほ「友人も出来て何よりよ。」

麗々「前から知ってるしね：それより姉さん達はやっぱり来れなかったんだ：」

しほ「仕方ないでしょう、二人とも新入生達への挨拶があるんだから」

麗々「なら後で電話で入学祝いのお礼言っておくよ。」

しほ「そうしなさい、私は学園長とお話をしてからここで」

麗々「うん、ありがとうお母さん！」

秋瀬「クラスも同じだね」

麗々「そうだな：やっぱり共学1年目だし男は少ないな」

秋瀬「まあ野球部に入りそうな人達は僕がかき集めてきたから問題ないよ。」

麗々「おお、どんな奴らだ??」

秋瀬「それは見てのお楽しみ」

麗々「りよーかい、HR終わったら戦車道の方に顔出しに行ってくるわ」

秋瀬「なら僕は野球部の申請を出してくるね」

麗々「頼んだ」

「そーいや姉さん達にイヤホンもらってたな、付けてみよ

麗々「おお、使いやすい。挨拶終わったら姉さん達にありがとうの電話後でしなきや

…」

みほ「なんで後回しなのかなあ？麗々。」

みほ「プラウダの女共優先なの??」

みほ「そんなの私許さないから…」

でも、そのイヤホン使ってくれる限り、麗々の声は全部聞こえてるからね??

だから大切に使ってね…??

その頃もう1人のお姉ちゃんは

まほ「グローブ合うといいが…バットも送ってやるか。」
まほ「しかし心配だな…大丈夫だろうか？」

普通にいいお姉ちゃんしました。

第5話

黒森峰は昨年10連覇を達成した。しかし、ルールの変更が無ければ負けていたのではないかとの声も上がっており、その練習は過酷なものになっていた。

まほ「集合！これより各車両のテストを行う！」

まほ「移動しながらの装填 砲撃！装填出来る弾は3発まで！被弾して走行不能になればそこで終了だ！」

まほ「1対6の状況で、如何に被弾せず相手のフラッグ車を倒せるか！出来るまでやるぞ！」

黒森生「隊長！それはあまりにも…その…無謀かと…」

まほ「無謀か…みほ！エリカ！…出来るな??」

みほ「はい、その程度なら出来ます。」

エリカ「はい！6両程度ならば同じく。」

まほ「ならば手本を見せてやれ。お前達も目の前で2チームも完遂できて出来ないとは言えない。」

まほ「そしてみほ、エリカ。出来ると言ったな？ならばお前達は1対10だ。」

みほ エリカ「はい!!」

みほチーム

みほ「やることは簡単です。敵は間違いないくフラッグ車を守るように陣形をとっています。恐らく3両程で守っているはずです。残りの車両は殲滅しに来るでしょう。」

みほ「なら話は簡単です。殲滅しに来た6両を背負って相手陣地に攻め込みます。」

操縦手「それはいくらなんでも被弾するんじゃない？」

みほ「私が指示を出します。ただし私も、皆さんも…神経が焼ききれる程の集中力が必要です。1人でも気が緩めば被弾します。…出来ますか？」

砲撃手「やります。1ミリも逸らしません。」

操縦手「…信じます。」

装填手「任せてください。」

みほ「では行きます。パンツァーフオー！」

みほ「早速攻めてきました。予想通り6両ですな…

まずは全力前進！焼ききれぬ寸前まで飛ばしてください！！

操縦手「了解しました！！！！」

みほ「10メートル先で急停止！停止後前方に砲撃してください！！砲撃後即座に左前方に全力前進！！！！」

敵車長「ちよつと！！土煙で何も見えない！！とにかく数で攻めれば勝てるのよ！！全車両砲撃！！」

6両での砲撃はみほ達の車両に当たることは無く

6両は抜き去られ

敵陣地まで全速力で突っ込んできた

その後ろに敵車両6両を引き連れて

フラッグ車長「な、何あれ：何で6両で攻めて抜かれてるのよ!!」

みほ「いいですか、30メートル先で右前方に15メートル。その後左へ直角に10メートル前進。」

フラッグ車長「ちよ、ちよつと!!早く当てなさいって! 囲んでるのよ!!?なんで当たらないの!?!もつと撃ちなさい!!」

みほ「90°。右に方向転換。1メートル前進後、砲撃。」

引き連れてきた6両の砲撃が

敵フラッグ車に全て命中した。

更には守っていた3両の砲撃は

後ろの6両いた戦車のうち3両に命中

敵フラッグ車の砲撃は

みほ達車両の砲撃により撃ち落とされていた

まほ「そこまで！みほチームの勝利！！」

「みほ「頭回しすぎて頭痛いよ……」

砲撃手「最後の1発に神経使いすぎて……」

装填手「装填間に合って良かった……」

操縦手「目が回って気分悪い……」

まほ「確かに最近のトレーニングはハードだったが、ここまで強くなつてるとは……」

みほ「これでも勝てる気がしないよ、麗々が指揮するプラウダには。」

まほ「そうか。みほは麗々の指揮を見てきたんだっとな……しかしこれでも勝てないのか？どれ程の指揮なんだ……？」

みほ「こつちの動きを完全に見切つて動いてくるから……勝つには向こうの動きを完全に力で上回るしかないと思う。」

まほ「ふむ……まあいい。次はエリカ！行けるか？」

エリカ「はい、いつでも。」

エリカ「指示は一つだけよ。全部避けて一撃必殺。」

砲撃手「了解。」

装填手「任せて。」

操縦手「避けるのはいいけどちゃんと指示ちようだいね？」

エリカ「任せなさい。」

まほ「それでは、始め！」

エリカ「突撃開始！突っ込むのよ！！」

それはまさに西住流だった

撃てば必中、護りは硬く、進む姿は乱れなし

三発しかない制限の中で、偵察隊2両を二発で沈め

残りフラッグ車含め4両、被弾はするものの装甲にかする程度。

そしてフラッグ車に至近距離からのとどめの一撃

まさに突撃 一撃必殺。

一切の迷いなく、1度も止まることなく、前進のみ。

最高速度で駆け抜けた。

エリカ「負けてられないのよ。みほにもプラウダにも。」

エリカ「そうよね？ 麗々。」

まほ「さあ、10両相手に2チームはやってのけたぞ。良かったな。お前達はたったの6両だ。出来ないとは言わせないぞ…??」

黒森生「」

このテストに全チーム合格したのは、それから6時間後だったそうさ。

まほ「全員集合！これで全チームクリアな訳だが…」

まほ「何だこの体たらくは。いいか、私達は10連覇を成し遂げた黒森峰だ!!」

まほ「負けは許されない。いいか、常勝軍団は私達黒森峰のみだ。巷ではサンダース、聖グロリアーナ、プラウダ等が強豪校と言われているが…」

まほ「私達から見れば強豪校などではない。強豪校とは実力が均衡しているからこそそう呼ばれるんだ。」

まほ「私達と今名前を上げた高校が実力が均衡しているか? いいやしていない。私達の足元にも及ばないっ!!」

まほ「世間に。そしてOB達に。10連覇出来たのはルールの変更があったからと言われているのは知っているな?」

まほ「ならば示すしかないだろう。完膚無きまでの勝利で! 圧倒的強さで!!」

まほ「着いてこれないのならば辞めればいい。しかし着いてこれると言うのなら。必ず栄光を掴ませよう。」

まほ「それが私の。常勝黒森峰の隊長の役目だ!!」

この演説は、後に歴代最高の隊長の言葉として代々引き継がれていく。

常勝黒森峰。歴代最強チームの完成まで、そう時間はかからなかった。

みほ「お姉ちゃん！凄かったよさっきの！」

エリカ「隊長！とてもかっこよかったですっ!!」

まほ「ああ…寝ずに考えたからな…すごく眠い…風呂に入ったら仮眠をとるから、食事の時間に起こしてくれ…」

エリカ「わかりました！ゆっくり休んでください！」

みほ「で？エリカさん。話って何かな？」

エリカ「分かつてるでしょ？麗々の事よ。どうして私に麗々がプラウダにいること教えてくれなかったの？」

みほ「聞かれてないことを答える必要はあるのかな？」

エリカ「もういいわよ？さつき麗々から電話があつてね、その時に教えて貰ったから。今度帰ってくるからデートしてくださいって言われちゃった。」

みほ「…へえ。で、それを私に言っただうしたいの？」

エリカ「あら、てつきり私は麗々にちよつかい出さないで！とか言うと思つてたんだけど…」

みほ「勘違いしてる可哀想なエリカさんに教えてあげるね。麗々はあなたみたいな男勝りな女なんてタイプでもなんでもないよ？」

エリカ「負け犬の遠吠えね。大体あなたこそ姉のくせに弟のこと異性として好きなんておかしいんじゃないの？」

みほ「……………」

エリカ「……………」

エリカ「まあいいわ、とにかく邪魔はしないでね。お姉さん??」
エリカ「私と麗々は相思相愛なんだから♪じゃあね♪」

みほ「やつぱり麗々には悪い虫が寄り付くなあ…」

みほ「大丈夫だよ、麗々。悪い虫がこれ以上近づかないように私が助けてあげるから。」

でも、麗々は暴力やいじめなんかは嫌いだからね…

そのためにはやつぱり、麗々を私に屈服させて。

私無しでは生きられないようにしないとね。

そうすれば悪い虫も寄り付かない。

まずは、予定通り麗々の心を破壊しないとね…

その為にここまで強くなつたんだから。

愛してるよ。全部壊れて、ボロボロになっても。
ゴコみみたいに。それ以上に愛してあげるから。

みほ「もう少しだけ待っててね。麗々。」

エリカ「麗々…。早く会いたいな…。」

エリカ「本当だったら付き合って1年くらいになってたのにね…。」

私が黒森峰中等部に入学して、初めて西住まほ 隊長を見た時。それこそ崇拜していた。今もただどね。

何とか近づこうと必死に練習して、2年生でついに一軍にまで駆け上がった。

ある日に隊長の家で作戦会議をすることになった。

まほ「遠慮せず上がってくれ。」

エリカ「は、はい！お邪魔します。」

緊張するなっつて方が無理よね：憧れの人の家だもん：

まほ「ああ、すまないが麗々。客人が来てるんだ、お茶を入れてくるから客間に案内してくれないか？」

麗々「ん？いいよお姉ちゃん。僕入れるからお姉ちゃん案内してあげてよ。知らない家に1人だと心細いだろうし。」

まほ「そうか？すまないな。なら頼む。」

麗々「はい、任せました。お姉ちゃんのお友達ですよ？どうぞゆっくりしていただきますいね！」

これが初めて麗々と会った日だった。

最初は気の利いたいい弟さん。程度だった。

それから数日経ってから、隊長から

まほ「すまないエリカ。弟からこれをエリカに渡してくれと頼まれてな…」

受け取ったのはラブレターだった。

内容はシンプルで 一目惚れしました。お友達からいいのでよろしくお願いし
す だった。

その下に連絡先が書いてあり、その横に小さく

そちらさえ良ければ連絡いただけると嬉しいですと書かれてあった。

ラブレターにしては丁寧すぎたのと、姉にラブレターを預ける人がいるんだなと考
え てしまったらつい吹き出してしまった。

それから連絡を取るようになって、相談にも乗ってくれて。気づいたら私も好きに
な ってた。

デートも回数を重ねて、

気づけば私は高校入学を控えていた。

そして直接告白された。

麗々「エリカさん。好きです、付き合ってください。」

そしてめでたく付き合うことになった

はずだったのに。

麗々「ごめんなさいエリカさん。そうですよ、戦車道で忙しいのに。僕と付き合っている時間なんてないですよ。お姉ちゃんに言われてから気づくなんて、僕舞い上がりすぎてました。」

エリカ「え…？どうしたの？そんなの気にしてないわよ…？」

麗々「エリカさん。高校卒業して、それでも好きでいてくれるのなら、その時にもう一度告白にいきます。なので戦車道に専念してください！あ、でもたまにはデートしてくれたら嬉しいです…」

全部みほの仕業だった。

ふざけるな。

人の恋路を邪魔するなんてありえない。

まだこの時は、大事な弟くらいにしか感じてなかったはず。

それでもここまでするくらいには麗々の事好きだったんでしょね。

でもね

エリカ「麗々は私のモノだから。あげないわよ？」

戦車道で結果さえ残せば。待たなくていいわよね??

だから…ごめんね麗々。

全力でプラウダと、貴方の戦略。潰してあげる。

第6話

麗々 「うーん…電話しても姉さん達出ないや…」

麗々 「母さんまだ居るかな？」

麗々 「あ、いた。かあさーん？」

しほ 「何かしら？」

麗々 「姉さん達に連絡したんだけど繋がらなくて…」

しほ 「あらそう。なら逸見さんに連絡すればいいんじゃないかしら。」

麗々 「いや…実は連絡先知らなくて…」

しほ 「はあ？貴方達お付き合いしてるんじゃないの？」

麗々「色々あって…高校のうちは戦車道に専念して欲しいなど…そのまま機種変しちやつたから連絡先知らない…」

しほ「そんなんじや振られるわよ貴方。連絡先教えてあげるから連絡しなさい。」

麗々「ありがとう…」

麗々「あ…もしもしエリカさん…？」

麗々「うん、そうだよ。麗々。元気だった？」

麗々「うん、うん。いや、姉さん達に入学祝い貰ってたからお礼言おうと…え？どこに入学したか？プラウダだよ。」

麗々「うん…そうなの？姉さん達に聞いてたのかと思ってたよ…うん。」

麗々「そうだ、今度そつちに戻るからご飯でも行かない…？うん。」

麗々「分かった、連絡取れなかったのは本当にごめん…」
麗々「じゃあ、また。」

久しぶりに話して緊張した…まだドキドキしてる…

ってこんなことしてる場合じゃないや、野球部に顔出さないと!!

秋瀬「ホームルームでいったメンバーだ。監督も元メジャーリーガーだ!!麗々も知ってるでしょ?」

麗々「いや、知ってるけど…」

アルベルト「オー！生き生きとした野球少年達がこんなにも！指導のやり甲斐があり
マース！ではまずはストレッチから!!」ゴリゴリゴリツ!!

アルベルト「オーノー！全身の関節が外れました…救急車を呼んでください。」

麗々「なんでよりによってアルベルトさんなんだ…??」

秋瀬「そして選手は3人連れてきた。」

林「一郎です」

林「三郎です」

林「勇気です」

秋瀬「林三兄弟、3つ子だ。」

麗々「知らないし名前の統一性の無さはなんなの。」

一郎「お父さんが寝ずに考えたそうです。ちなみに僕は三男です。」

三郎「長男です。」

勇氣「次男です。」

麗々「ダメだ覚ええられる気がしないんだけど。顔も何もかも同じだし…」

勇氣「大丈夫です。家族もたまたま間違えるんで。」

麗々「間違えるの!？」

勇氣「たまたま自分が勇氣なのかすら分からなくなります。」

麗々「なんの哲学…?」

秋瀬「でも実力は間違いないよ。3人とも外野手で、その連携は中学時代最強の3つ子外野手って呼ばれてたからね。」

麗々「ま、まあいいや…他の入部希望者は?」

秋瀬「ざっと数えて僕達も合わせて30人くらいだね。」

麗々「結構いるね…」

秋瀬「野球、サッカー、テニスはモテるからな。」

麗々「え、殆ど下心なの?？」

秋瀬「そりやそうだろ、プラウダは美人多いからな。」

麗々「なるほど、本気でしごけば何人減るかな？」

秋瀬「やめてあげて…」

人数も多く、実力を知りたいので練習試合をすることにした。監督？全治3ヶ月の重症でした。

秋瀬「僕と麗々は別れてやろうか。」

麗々「だね、じゃないと試合にならないからね…」

林「秋瀬くん、西住くんって何でも屋の西住くんであってる？」

秋瀬「ああ、そうだよ。所でどの林くん？」

林「一郎です。そうか彼がそうなのか…彼のリードは誰も読めないって噂回ってたな。」

秋瀬「まあ打席に経てばわかるさ…」

秋瀬	チーム	0	0	0	0	0	0	0	0
麗々	チーム	0	0	0	0	0	0	0	1×

長くなるので最終回の攻防のみハイライトしよう

林1 「バットの芯に当たらない…120キロも出てないのに…」

林2 「あんな投手中学の時にいたっけ…？」

林3 「ちがう、あれはリードが凄すぎるんだよ…」

秋瀬 「こつちが外角低めのストレート狙ってたら、内角高めに変化球投げ込んでくる。完全に狙い球の裏をかいてくる。」

秋瀬 「たまらないよね。麗々がリードするだけで、無名の投手が完封だよ。」

モブ投手 「凄い…西住くんがリードすれば、僕はプロ野球選手にでも簡単になれそうだよ！」

9 回裏

麗々 「……………」

うん。投げてくる球種は…スライダーか。落ちながら逃げていくボールだ。

外角低めギリギリ。なら右に流せばいい。

打球は一二塁間を破ってヒットになる

麗々「……」

秋瀬「スチール！」

秋瀬「殆ど投げてない緩いボールのタイミングで…」

次の打者は送りバントで送って、1アウトランナー3塁

秋瀬「なら、外野フライすら打たせない！」

麗々「そうだね。ストレートで押しってくるよね…?」

麗々「知ってたよ。」

打者は打球を思い切り叩き付けた…

麗々が悠々とホームに帰ってきた。

アルベルト「オーウ…。もつと腰でバットは振らなきや打球は飛ばないデース。お手本をお見せしマース。」バキツベキボキボキ!!

アルベルト「オーノー…。腕と腰の骨が折れました。救急車を呼んでください。」

麗々「さつき全治3ヶ月言つて無かった?」

秋瀬「治ったらしいよ…」

秋瀬「それより麗々。初回から頭を使い続けてるだろう？ここはいいから先に頭休めてきな。」

そう。相手の行動を読めるが、その分神経をすり減らしているから…物凄く辛い。

麗々「了解。頼んだ。」

頭を使った後は糖分が欲しくなる。

麗々「売店にチョコレート売ってたかな…」

カチューシャ「麗々じゃない！何してるの？」

麗々「カチューシャさん。チョコレートを買いに行こうと…甘いもの欲しくて。」

カチューシャ「ふーん。ノンナー？」

ノンナ「はい、お呼びですか？」

麗々「今どこから出てきました…？」

ノンナ「世の中には知らない方がいい事もありますよ。私からのアドバイスです。」

麗々「は、はい。」

カチューシャ「ノンナ、ティータイムにしましよ！麗々、貴方も来なさい！美味しい紅茶と甘いクッキーもあるわよ？」

麗々「なんかすみません…お邪魔して…」

ノンナ「そんなに気を使わなくてもいいですよ。貴方は戦車道の仲間。チームメイトなのですから。」

カチューシャ「そうよ！それに沢山いた方が楽しくティータイム出来るからね！」

ノンナさんが用意してくれた紅茶とクッキーはとても美味しかった。

カチューシャ「それで？野球部はどうだった？大会で勝てそう？」

麗々「……なんとも言えないですね。守備力、打撃力、投手力。高校から始めた生徒が多くて……まあ1年目ですし仕方ないです。」

ノンナ「どれだけ指揮が優れていようと、その指揮に着いてこれる実力が無いと宝の持ち腐れです。」

カチューシャ「野球はあまり分からないけど、負けに仕方ないは絶対じゃないわ。やるからには勝ちに行きなさい。」

ノンナ「言い方は酷になりますが……その状況で戦車道との両立など無理だと思います。」

麗々「…分かっていません。」

カチューシャ「分かってないわね。その分だと。」

カチューシャ「貴方、戦車道は片手間でもいいとか思っていない？」

麗々「そんなことは!?!」

カチューシャ「貴方には大して思い入れが無いかもしれないけど。私達は負けたら終

わりなの。」

カチューシャ「軽い気持ちでやろうとしてるのなら今すぐに辞めて貰っても構わないわ。」

麗々「軽い気持ちでなんて…」

カチューシャ「違うって言うのならハッキリ言ってみなさい。貴方野球に対してもそうよ。何よ、仕方ないって負けて当然なんて思ってるでしょ。」

カチューシャ「私はブラウダの隊長よ。全員の覚悟を背負ってるの。神経をすり潰される？だから何？それを全部背負ってこそその隊長よ。キツイ？辛い？そんなものシベリアにでも送りなさい。」

カチューシャ「そんな私の大切なチームを片手間に指揮しようなんて許さないわ。」

カチューシャ「一つだけ隊長として教えてあげるわ。」

カチューシャ「どんな酷い状況でも、みんなにはこういうのよ。」

カチューシャ「こんなものどうってことないわ!!私が勝たせてあげるわ!!ってね。」

麗々「…もしそれで負けたらどうするんですか…?」

カチユーシヤ「負けた時の事を考える余裕があるのなら、勝てる手段を探しなさい!!」

凄いな。どれだけのプレッシャーを背負っているんだろう。

しかもそれを全て跳ね返す度胸。これがチームを引っ張るリーダーか。

麗々「ありがとうございます、カチユーシヤさん。さっきの言葉取り消させてもらいます。」

麗々「1年目だとか関係ない。死に物狂いで勝ちに行きます。」

カチユーシヤ「そう。せいぜい頑張りなさい!」

その後は楽しくティータイムを過した。

クララ「失礼しますカチユーシヤ様。麗々さんをお借りしてもよろしいでしょうか？」

カチューシャ「どうしたの？」

クララ「アルベルト先生が探しておりますので……」

麗々「アルベルト先生が？なんだろう……」

アルベルト「oh、麗々くん。少し頼みがあるのですが。」

麗々「どうしました？」

アルベルト「野球部の練習試合のアテはありませんか？オリエント高校に頼んだのですが断られました……」

麗々「うーん……少しあたってみますね。」

アルベルト「お願いしマース……」

うーん、とは言ったもののアテなんか無いし……

とりあえず色々と連絡してみるか…

みほ 「練習試合か…：そう言えばうちにも野球部出来たよね。」

みほ 「いいこと思いついた。待っててね麗々。」

7 話

監督に練習試合の相手を探してくれと言われて、色々と声をかけてみたけど…

麗々「ダメだ、どこも断られる…」

すると着信が入った

麗々「はい、もしもし。」

みほ「もしもし？麗々元気？」

麗々「なんだみほ姉か、元気だよ。」

みほ「なんだとは何よ。それよりも練習試合の相手探してるんだって？」

麗々「そうなんだけど全然見つからなくて…」

みほ「うちの野球部に頼んでみようか？」

麗々「いいの？」

みほ「でも条件があるよ？」

カチューシャ「で？その条件が私達と練習試合をすることねえ…。」

麗々「はい、でもライバルですし、無理して引き受けて貰わなくても…。」

カチューシャ「いや、試合するのはいいのよ。貴方をどうしようかと思ってね…。」
ノンナ「そうですね、出来れば秘密兵器は使いたくないですから。」

秘密兵器って言い方はちよつとむず痒いなあ…

カチューシャ「決めたわ、貴方は参加しない。それと試合形式はフラッグ戦。これで良ければ受けてあげる！」

麗々「わかりました。確認してきます！すみません野球部のために無理言つて…。」
カチューシャ「そのかわりしつかり糧にしなさい！」

麗々「カチューシャさん、ノンナさん。お待たせしました、その条件で大丈夫だそうです。」

カチューシャ「あら、もつと駄々こねるかと思つてたけど。」

麗々「そのかわりこつちに条件を出してきました。僕がキャッチャー出場しない。出る場合はファーストのみだそうです。」

カチューシャ「……そう。どう思うノンナ。」

ノンナ「分かりません。が、麗々、ファーストと言うのは守備機会の頻度はどれくらいですか？」

麗々「頻度……ですか。そうですね……守備面はともかく、ボールに触れるのは投手とキャッチャーについて多いですね。ファーストにボールは送球されることが多いですから。」

ノンナ「……わかりました。」

麗々「では、監督とチームメイトに試合の件伝えてきます。」

カチューシャ「ノンナ。嫌な予感がするわ。」

ノンナ「はい。私もです。」

カチューシャ「クララー、いる？」

クララー「はい、こちらに。」

カチューシャ「少し頼みがあるわ。」

クララー「了解しました。」

麗々「と、言うわけで黒森峰が練習試合を引き受けてくれました。」

アルベルト「サンキュー、西住くん。」

アルベルト「西住くん。監督からのアドバイスデース。」

アルベルト「ファーストはクロスプレイが多いデース。くれぐれも注意して下サーイ？ 貴方は我がチームの司令塔ですカラ。」

秋瀬「……ファーストのみねえ……。」

秋瀬「三郎くん。中学時代キヤッチャーもしてたよね？」

三郎「うん。どちらかと言えば外野よりキヤッチャー多めだったから大丈夫だよ。」

秋瀬「麗々。試合はいつ？」

麗々「一週間後だよ。」

秋瀬「分かった。三郎くん、プルペンへいこう。」

三郎「了解、まさか東北の魔術師の球を受けるなんて予想もしてなかったよ。」

秋瀬「……嫌な予感がする。」

その頃黒森峰

まほ「いいかみんな。一週間後のプラウダ戦、練習といえど負けは許されない。気を抜くなよ！」

黒森峰野球部

主将「いいか！あの秋瀬と、西住。更には林三兄弟のいるチームとの練習試合だ！残念だが今回西住はファーストでの出場らしい！」

主将「こんな機会は滅多にない！盗めるだけ技術、戦略を糧にしよう！」

部員「はい!!」

部員「……………」

そして一週間後。黒森峰での戦車道、野球部の試合が行われた。

カチューシャ「今日はよろしくね！マホーシャ！」

まほ「ああ、胸を借りるつもりでかかってこい。」

ノンナ「……いいえ。そちらこそ胸を借りるつもりでどうぞかかってきてください。」

みほ「……麗々はいんですか？」

カチューシャ「ええ、麗々はこの試合のあとすぐ野球部の試合だし、わざわざこちらの手の内晒したくもないしね？」

みほ「ふーん。後悔しても知りませんから。」

ノンナ「……麗々が居ない事をハンデと捉えてもらってもいいですよ？」

麗々が居ないのは予想外。だけどまあ、随分プラウダに馴染んでるみたいだね麗々。盗聴器で大体分かってたけど。

腹ただしい。誰の許可を得て下の名前で呼んでるの？

まあいいよ。そのかわりその貴女達のプライドと誇り。

粉々にしてあげるから！

戦車道試合前

麗々「カチューシャさん、ノンナさん。姉さん達に会ってきました。それで伝えたいことが。」

カチューシャ「？何かしら、大事なこと？」

麗々「はい、姉さん達は圧倒的勝利をあげようとしています。間違いなく、全車両で突貫してきます。作戦内容も個々での力量に任せると思っています。」

ノンナ「それで？私たちに何をしろと？」

麗々「それはですね…」

カチューシャ「…なるほどね。」

ノンナ「…麗々が私達のチームメイトで良かったです。絶対に相手にしたくない…。」
麗々「ノンナさんそれ褒めてます…？」

試合は6両同士のフラッグ戦で開始した。

まほ「……………麗々か、この作戦を考えたのは…っ」

エリカ「ありえないでしょこんな作戦!!!!」

みほ「……本当に麗々のせいで全部狂う!!!!」

作戦内容はこうだ。

フラッグ車を囲むように6両固まり、敵フラッグ車への突貫。

黒森峰は1両つつバラバラにバラけていた。

さらに試合前麗々はこう伝えた。

敵フラッグは間違いなく、エリカの戦車だと。

そして、間違いなく守りには入らずにこちらのフラッグ車を狙ってくる。

そしてまさにその通りになった。

周りからしてみれば、黒森峰のフラッグ車1両が、相手の6両の塊に突っ込んで行っているようにしか見えない。

さらにプラウダは開幕早々周りの地面に向かって無造作に弾を打ちまくった。

その砲声でエリカは突貫してくる。

勿論他の車両も周りから突貫。

本当ならプラウダを囲んでいたが、地面に総数20発の弾を撃ちまくっており、地形がめちやくちや。

つまるところ援護に行く事が出来なかった。

黒森峰のフラッグ車はなす術もなく、6両からの砲弾の雨を食らった。

勝者、プラウダ!!

ノンナ「本当に麗々の言う通りでしたね。」

カチューシャ「ええ、それにしてもこんなのじゃ張り合いも無いわ。時間の無駄よ。黒森峰、連携も何もありません。今なら聖グロやサンダースの方が間違いなく強いわね。」

まほ「……やはり、こうなるのか……チームとして動かなければ、このような状況の時に何も出来ないのはわかっていた。……みほに指揮を取らせるのはやはり早かったな。」

みほ「なんで……なんで……どうして……?これ以外の方法でどうやって麗々に勝てるって
いうの……?」

エリカ「この作戦自体は悪いとは思わないわ。だけどね。いくらうちの個々の力が格段に上がったとはいえ、戦車道はチーム戦よ」

エリカ「それも相手はブラウダ。昨年ルールの変更がなければ負けていた相手よ？相手を舐めすぎてたのよ貴女は。」

エリカ「麗々の作戦麗々の行動つて。貴女の目には麗々しか見えてない。馬鹿馬鹿しい。」

みほ「…うるさい。麗々なら間違いないく守り勝つ試合運びをするはずだったの!!なんで攻めてくるの!?!絶対何か不正でも」

まほ「いい加減にしろみほ!!!!」

まほがみほに平手打ちをした。

周りの黒森峰生は皆下を向いている。

まほ「確かに麗々は凄いい、よく分かっている!!」

まほ「だからこそ臨機応変に動ける作戦にするべきだと何故分からない!!それだけならまだしも、負けた理由を不正だと言うのか!!」

まほ「もういい。お前に期待した私が馬鹿だった。二度とお前に作戦も考えさせん。

チームの指揮もさせない。」

みほ「ごめんなさい…っ！ごめんなさい皆さん…ごめんなさい…っ!!」

まほ「…分かればいい。さあ、顔を洗ってこい。せつかくの美人が台無しだ。」

みほ「…うん。」

恥ずかしい…思いつきり泣いちゃった。そうだね…麗々にはどうやっても作戦では勝てないんだ。これで勝ててればやる必要は無かったけど…

みほ「……………もしもし、うん。作戦通りにやってね？じゃないとバラしちゃうから。」

上手くやってよ？まあバレても私の名前は出さないだろうけど。

その頃黒森峰のグラウンド

秋瀬「麗々、戦車道はうちが勝つたらしいよ！」

麗々「おお、流石カチューシャさん。俺達も負けてられないな……」

試合開始から1時間が経過した

現在6回の表

黒森峰 0―12 プラウダ

黒森主将「いやあ……強すぎるって……」

試合は一方的。打線は3・4・5番の林三兄弟で8打点。

投げては秋瀬が5回までパーフェクトピッチング。

麗々「僕何もしてないんだけど……」

一郎「何言ってるの、ヒット3本打つといて。」

麗々「いやそうだけどさあ…」

やつぱりキャッチャーで守りたいなあ…

秋瀬「さ、6回もきっちり抑えよう!!」

まあでも、これなら夏の大会も間違いない順調に勝ち進めそうかな?

麗々「ぐううつ…!!? 足が…つ足が!!? 痛い痛い痛いっつ
!!!!?」

秋瀬「麗々!!大丈夫か!?!おい!!」

アルベルト「担架はまだデスカ!?!急いで下サーイ!!!!」

秋瀬「くそっ…嫌な予感はしてたけど…っ」

部員1が打った打球は平凡なサードゴロだった。

しかしボテボテの打球でアウトかセーフかは微妙なタイムミングだった。

こういう場合ファーストは、脚と腕を限界ギリギリまで伸ばして、1番遠い場所で捕球をする。

その脚目掛けて、部員1はヘッドスライディング。

そしてベースについている麗々の足を思いつきり捻った。

土煙が巻き上がりその瞬間は誰も見えなかった。

だからこそ不慮の事故。誰もがそう思った。

黒森主将「部員1、大丈夫か？」

部員1「はい、僕は何ともないです…」

黒森主将「そうか…相手さんには悪いが、事故だ。あまり気に病むなよ…。」

クララ「それはそれは良かったですね…？貴方に怪我が無くて。」

クララ「まあそうですね、初めから事故が起きると知っていて、怪我する馬鹿はいませんから。」

黒森主将「…おい誰かは知らないが、事故が起きると知っていただろ？そんなわけないだろう!!」

クララ「なら試合を録画していたこのビデオでも見てみましようか??」

部員1「…そ、そんなの見る必要なんて無いでしょう。誰が見ても事故じゃないですか!」

クララ「少し黙って貰えませんか？これでも怒りを抑えるのには苦勞してるんです。」

部員1「…っ。」

そして映像には

部員1が麗々の足首を無理矢理捻っているシーンが確認された。

黒森主将「なんでこんなことをした…?」

部員1「た、頼まれたんです…」

秋瀬「誰にだ!!!」

部員1「ひっ…それは言えません…!!言うとな僕の人生が…つうわあああああああ
!!!!」

秋瀬「話を聴ける状態じゃないね…くそっ!!!」

みほ「……ふふっ。」

麗々は直ぐに医務室に運ばれ治療を受けた。
戦車道等で人が多い黒森峰には普通の病院と変わらない程の施設がある。

その待合室にカチューシャ達はある。

カチューシャ「嫌な予感が当たっちゃったわね……」

ノンナ「……はい。クララ、麗々の状態は？」

クララ「……完全に右足首が折れています。さらに倒れた拍子に右膝も……さらに右足首に関しては完全に反対を向いていて……全治6ヶ月。野球に復帰できるかは五分五分だそうですね。」

カチューシャ「ノンナ。気持ちは分かるけどダメよ。クララも。」

ノンナ「ですが、同じ目に合わせてやらないと気が収まりません。」

クララ「……私もです。」

カチューシャ「……今私達がやらなきや行けないことは麗々の心のケアよ。そんなことに使ってる時間はないわ。」

ノンナ「……麗々の様子を見てきますね。」

カチューシャ様も悔しいはずです…
クラーラも、そして私も…

ノンナ「……………」ガンッ!!ガンッ!!

壁を幾ら殴つても、痛いのは私の手だけ。

麗々を痛めつけた男に傷が入る訳でもなければ、麗々の傷を肩代わりできる訳でもない。

麗々の病室に入る。

麗々「あ、ノンナさん。」

ノンナ「麗々!! 起きたんですね。直ぐにカチューシャ様達を呼んできます。」

麗々「待って、ノンナさん…」

ノンナ「……………」どうしました?」

麗々「右足の感覚が無いんだけど…これ麻酔のせいですよね…?」

ノンナ「…麻酔は…3時間前に切れています…。」

そう。麗々は痛みで意識を失い、ほぼ1日眠っていた。

そして麻酔は必要ないという判断になった。

ノンナ「麗々、落ち着いて聞きなさい。」

麗々「まつてよ、なんで動かないの…?」

ノンナ「麗々、落ち着きなさい。」

麗々「ねえなんで…動けて…!!動けよ!!」

ノンナ「麗々っ!!」

私は思わず麗々を抱き締めた。

麗々は涙を流しながら抱き締め返してくる。

麗々「なん…でっ…僕が…こんな…目につ!!僕が…な…何したって言うんだ…っ!!」

嗚咽混じりに…気持ちいを吐き出す。

抱きしめた体を離し、麗々に語りかける。

ノンナ「よく聞きなさい。歩けるようになるまで6ヶ月。走れるようになるまで1年

半。野球が出来るようになるまで2年です。」

ノンナ「ただし、3ヶ月以内に足の感覚が戻れば、の話です。そこは運に頼るほかありません。」

麗々「……………」

ノンナ「……………今はゆつくりと休みなさい。私はカチューシャ様達に報告を……………」

麗々に腕を掴まれる。

麗々「……………行かないでください……………見捨てないでください……………一人に……………しないでください……………」

そう泣きながら……………作り笑いをして私に言った。

私はこの表情を知っている。心が壊れる寸前の顔だ。この手を振り払えば、麗々は完全に壊れるだろう。

だから私は

その手を取り、抱き寄せた。

ノンナ「……仕方ないですね。眠るまでそばに居ますのでゆっくり休んでください。」
麗々「……ありがとうございます……ノンナさん……」

一人プラウダに来て、姉妹とは敵同士。野球部のメンバーとも今は関わりたくないだろう。

ノンナ「……大丈夫ですよ。」

麗々「……はい。」

麗々「すみません、抱き着いてしまつて。」

ノンナ「気にしてません。」

麗々「……嫌いになりましたか……？ノンナさんに嫌われたくないですよ……？」

なんて顔してるのですか、麗々。

そんな悲しそうな顔……

ノンナ「嫌いになんかなりませんよ…？だからいまはおやすみなさい。」
麗々「……はい。」

寂しいのだろう。無意識に手を握ってきた。
その手を握り返してあげる。

ようやく眠った麗々の頭を撫でる

ノンナ「さっきの表情。心の弱さ。カチューシャ様とクララ以外に見せてはいけませんよ…？」

そう言えば麗々は黒森峰の逸見エリカと付き合っている
と言う話を良く聞きますが

少し違います。

付き合っていて、いまは別れています。

高校を卒業したらまた復縁するそうですが…

すみません、逸見エリカ。

復縁なんてさせません。

麗々の心から貴女を消してみせましょう。

第8話

事故から2週間がたった。

僕は今車椅子生活だ。

足の感覚は…

戻っていない。

右足を踏み出そうとすると前に倒れてしまう。

あの日、ノンナさんには恥ずかしい所を見せてしまった。

その次の日、お母さん、みほ姉、まほ姉、そしてエリカさんがお見舞いに来てくれた。

しほ「……だから野球なんてやらない方が良かったのよ……」

麗々「……ごめんなさい。」

みほ「お母さん、そんな言い方……」

しほ「大事な息子が歩けないかもしれないのよ!? 私は一生野球を恨むわ……」

まほ「しかし、今回は故意の事故です。野球が一概に悪いとは……」

みほ「でも、野球をやってなければこんなことには……」

まほ「……」

麗々「……足が治れば野球を続けるよ、僕は。」

しほ「ダメです、絶対に許しません。」

麗々「……どうせ治らないんだ。なら夢くらいみさせてよ!!」

まほ「馬鹿なことを言うな!!!絶対に治る!!!二度とそんなことを言うな……。」

みほ「……麗々。黒森峰に来なよ。チームメイトにも顔を会わせずらいでしょ……?」

麗々「……野球は辞めない。絶対に。だから、プラウダに残る。」

みほ「……キツイこと言うけど、野球が出来るようになっても2年かかるんだよ？2年も練習しなくて試合に出て、チームの足を引っ張るつもり？」

麗々「…それは…。でもっ!!…諦めきれない…んだ…。」

エリカ「……麗々から野球を取らないであげてください…。」

みほ「家族で話してるの、エリカさんは黙って聞いてて。」

エリカ「出来なくても、試合に出れなくても。夢の為に必死に考えて麗々は言ったはずよ。野球がやりたいって。ならそれを最後まで見届けてあげるのが家族じゃないの??」

しほ「……麗々。この話は保留にします。足が治ってからまた話しましょう。」

しほ「みほ、まほ。出るわよ。2人にさせてあげましょう。」

まほ「はい…エリカ、頼んだぞ。」

みほ「……………」

エリカ「麗々、しゃんとしなさい。私が惚れた貴方はそんなヤワじゃないわよ。」

麗々「…足が動かないんだ。感覚もない。」

エリカ「絶対動くわ。感覚も戻る。」

麗々「野球がしたい。全力で走りたい。」

エリカ「簡単よ、早く足を治せばいいの。」

麗々「……やっぱエリカさんだ。僕の一番欲しい言葉をくれる。」

エリカ「当たり前よ。貴方のことは私が一番知ってるわ。」

麗々「……もし足が治らなかつた時は、ごめん。」

エリカ「治るって言ってるでしょ？…仮にダメでも、貴方を見捨てたりしないわ。」

麗々「…うん。」

クララ「麗々？」

麗々「あ、すみません…考え事してました…。」

まあそんなことがありました。

今はクララさんに車椅子を押ししてもらい、戦車道倉庫に向かっている。

カチューシャ「麗々!!遅いじゃない!!」

ノンナ「カチューシャ様、車椅子ですので仕方ないかと…」

麗々「あはは…で、僕は何故呼ばれたのでしょうか…?」

ノンナ「麗々、貴方は推薦で入学しましたよね?」

麗々「え?はい、そうですけど…」

クラーラ「推薦入学者は、スポーツで結果を残す、試合に出る等しないと退学になってしまいます。勉強が優秀なら良かったのですが…」

ノンナ「なので、麗々に公式戦の指揮をとってもらいます。」

麗々「…大事な公式戦、僕でいいんですか…?」

カチューシャ「もちろん、と言いたいところだけど、私も口を出させてもらおう!!」

麗々「…わかりました。必ずや勝利に導きます。」

ノンナ「それですが、麗々。私達の寮に住みませんか？」

麗々「どうしてそうなるんですかね…？」

クララ「麗々は車椅子ですから、その方が何かと融通がききますので。」

麗々「でも許可がおりないんじゃないじゃあ…」

カチューシャ「大丈夫よ、この学園は私がルールよ!!」

ノンナ「流石カチューシャ様です。」

麗々「大丈夫なのかなこの学校…」

その後荷物等が運び出され、ノンナさん。クララさんの部屋の隣にお引越し。

荷物等は戦車道の皆が持ってきてくれたのだが…

麗々「あのお。イヤホン無かったですか…？姉からもらったものなんですけど…」

ノンナ「見ていませんね。後でもう一度探してみます。」

麗々「お願いします…」

ノンナ side

麗々、すみませんがあのイヤホンは渡せません。

麗々が怪我をした後。何故麗々が狙われたのか理由を調べました。

その他にもカメラ、盗聴器等仕込まれていないかも。

西住みほ。まさかワイヤレスイヤホンに盗聴器を仕掛けているとは…。

黒幕は西住みほ なのでしょうか…？

しかし実の弟を大怪我させる理由なんて…

まあいいです。何かあれば私が守りますから。

みほ side

あーあ、盗聴器バレちゃった。

麗々の声が聞けなくなっちゃった。

足が動かなくなれば黒森峰に来ると思ってたんだけどなあ。

エリカさんとプラウダの女共のせいで、麗々に大怪我させただけになっちゃった。

でもね??

足が折れた時の痛みがりよう。

動かないと知った時の絶望した顔。

とつても可愛かったよ? 麗々。

その顔を近くで見れるように私頑張るから。

待っててね??

麗々「うーん、一人で何にもできないのは辛いな…」

今僕は新しい部屋にいる、が。
如何せん歩けない。

筋力を落とさないために筋トレでもしようかと思っただが…

クララ「行けません!!それでどこか痛めたらどうするのですか!!!」
ノンナ「ダメです。許しません。させません。」

この過保護っぷりだ。カチューシャさんは

カチューシャ「筋トレ? 貴方に必要なのは知識でしょ? 戦車道の戦術を学びなさい
!!」

と言われてしまった。

うーむ…

麗々「バツト振りたいなあ…」

秋瀬「振る？バツト。」

麗々「おい、どこから入ってきた。」

秋瀬「そんなことはどうでもいいよ。振りたいなら付き合うけど、どうする？」

そんなこんなで素振りをすることになったのだが。

麗々「立てないから振れないんだけど。」

秋瀬「甘えるな、片足で立って振ればいい。」

麗々「無茶言うな!!」

秋瀬「なら、辞めるかい？野球。」

麗々「……なんだ？喧嘩売りに来たのか？」

秋瀬「いいや？ただ、一つだけ言えることは戻ってきた時にバットも振れないように戦力にならないからね。」

秋瀬「だから振れ。コケたら起こしてあげるから。今はがむしやりに振るんだ。何時間でも何日でも。何ヶ月でも付き合っただけだから。」

秋瀬「皆戻ってくるのを待ってるんだ。復帰してバットも触れなきやみつともないだろう？」

麗々「……治るかも分からないんだ。」

秋瀬「治らなかつたら仕方ない。その時は全打席ホームランでも打って這ってでもグラウンド一周すれば問題ないだろう？」

麗々「……ははっ。そうだね！なら、とことん付き合ってもらおうか!!」

バットを振る。だけど軸足が動かないから倒れる
だけど、笑いながら直ぐに起こしてくれる。

僕は笑いながら。そして泣きながらバットを振った。

ありがとう、秋瀬。

必ず完治させて、グラウンドに戻ってくるから。

それまでは任せたよ。

ノンナ「麗々!!? どうしてそんなに泥だらけで傷だらけなのですか!!!」

クララ「まさか誰かに殴られたのですか!? ああ、それよりも先に傷の手当を…!」

その後過保護2人に心配され、理由を話したら無言でピンタ2発くらいしました。

アルベルト「オーウ、お久しぶりでーす。」

??? 「ドウシマシタか？アナタがコールしてくるなんて珍しいこともアリマスね。」

アルベルト「実は私の生徒が大怪我したのデース…。なので治療をしてもらいたいの
ですガ…」

??? 「それは大変デース。」

??? 「状態をミタイノデース。ゲドー君。ミテキテモラエマスカ？」ゲゲツ